

## 上田城跡（上田藩主居館跡）

長野県上田高等学校合宿所等改築工事に伴う  
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2010. 2

長野県上田高等学校  
上 田 市  
上田市教育委員会

## 上田城跡（上田藩主居館跡）

長野県上田高等学校合宿所等改築工事に伴う  
埋 藏 文 化 財 発 掘 調 査 報 告 書

2010. 2

長野県上田高等学校  
上 田 市  
上田市教育委員会



1 堀跡の断面



2 近世の陶磁器



3 近代以降のガラス製品 その1



4 近代以降のガラス製品 その2



5 近代の薬瓶



6 近代以降の陶磁器

## 例　　言

- 1 本書は長野県上田市大手一丁目4番32号における埋蔵文化財包蔵地上田城跡（上田藩主居館跡）の発掘調査報告書である。なお、新市発足に伴い、現在、埋蔵文化財分布図の統合作業を進めているところであり、本文中の遺跡番号等は合併前のものを引き続いて使用している。
- 2 調査は合宿所等改築工事の実施に先立ち、長野県上田高等学校の委託を受け、上田市（上田市教育委員会事務局文化振興課文化財保護係）が直営で実施した。
- 3 調査は文化振興課文化財保護係 和根崎剛が行い、現地調査、遺物整理、報告書刊行を含めて、平成21年5月13日から平成22年2月26日まで行った。
- 4 発掘作業及び遺構実測は石田奈緒、上原祐子、滝澤百合香、上田高校郷土班が行った。遺物整理作業は石田、上原、高橋春美、滝澤が行った。遺物の写真撮影は和根崎が行い、一部をよしいけ企画に委託して実施した。
- 5 本文の執筆及び遺物観察は和根崎が行い、版組みは和根崎、上原、滝澤が行った。
- 6 調査に係る基準点測量を、株式会社共栄測量設計社に委託して行った。調査に係るパックホールの賃貸借は、和農興 竹内和好との単価契約に基づき実施した。
- 7 調査に係る資料は上田市立信濃国分寺資料館収蔵庫に保管してある。
- 8 本書の編集刊行は事務局（上田市教育委員会文化振興課）が行った。なお、調査結果は『市内遺跡（H20）』等で一部報告しているが、内容に相違がある場合は本報告をもって訂正する。
- 9 本書が刊行されるまでには、多くの方々や諸機関のご理解とご協力を賜った。以下、ご芳名を記して深く感謝の意を表したい。（順不同・敬称略）  
長野県上田高等学校、長野県教育委員会高校教育課、長野県教育委員会文化財・生涯学習課、上田高等学校郷土班、上田市文化財保護審議委員会、市川隆之、川上元、倉澤正幸、児玉卓文、佐藤和雄、祢津宗伸

## 凡　例

### [ 遺 構 ]

- 1 遺構実測図は原則として原図 1/100、1/20 である。
- 2 土層の色調判別には、農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修「新版標準上色帖」1997 年度版を使用した。
- 3 遺構写真図版の縮小は任意である。
- 4 調査に使用した基準点 (BM) の座標は下記のとおりである。

X 座標 44394.533 Y 座標 -22480.222 Z 座標 456.271

### [ 遺 物 ]

- 1 遺物は縮尺 1/2 を原則とした。例外はスケールで示した。
- 2 陶磁器等の実測方法は 4 分割法を用い、右側 1/2 に断面及び内面を左側 1/2 に外面を記録した。
- 3 遺物番号は実測図番号及び写真番号と対応している。
- 4 遺物写真図版の縮小は任意である。

### [ 観察表 ]

- 1 各観察表の遺物番号は図版の遺物番号と対応している。
- 2 遺物観察表の法量は、( ) が復元値、( ) が残存値、括弧なしは完存値を示している。

## 目　次

第 1 章 調査の経過 .....	4
第 1 節 調査に至る経過 .....	4
第 2 節 発掘調査の経過 .....	4
第 3 節 調査日誌（抄） .....	4
第 4 節 調査の体制 .....	5
第 5 節 調査の方法 .....	5
第 6 節 整理の方法 .....	7
第 2 章 遺跡の環境 .....	8
第 1 節 地理的環境 .....	8
第 2 節 歴史的環境 .....	8
第 3 章 遺跡の調査 .....	13
第 1 節 遺跡の概要 .....	13
第 2 節 基本土層 .....	15
第 3 節 遺構と遺物 .....	15
第 4 章 調査の成果と課題 .....	22

## 図版目次

第1図 遺跡の位置	9	第7図 基本上層及び堀跡断面図	16
第2図 調査地点位置図	9	第8図 近世の陶磁器	19
第3図 発掘調査全体図	11	第9図 近世以降の瓦	19
第4図 御屋形古図	12	第10図 近代以降の遺物 (1)	20
第5図 上田中学校園地 (明治36年)	14	第11図 近代以降の遺物 (2)	21
第6図 上田中学校校舎と運動場園面 (明治45年)	14		

## 写真目次

(カラー)

- 1 堀跡の断面
- 2 近世の陶磁器
- 3 近代以降のガラス製品 その1
- 4 近代以降のガラス製品 その2
- 5 近代の菓瓶
- 6 近代以降の陶磁器

(モノクロ)

- 1 発掘調査区と着手状況
- 2 基本土層
- 3 1号水路と旧合宿所の基礎 (北西から)
- 4 1号水路 (東から)
- 5 2号水路 (南から)
- 6 2号水路 (東から)
- 7 3号水路 (東から)
- 8 旧合宿所の雨落遺構
- 9 現在の堀の排水管と3号水路の切り合い
- 10 堀跡の断面 (1号トレンチ)
- 11 堀跡の完掘状況 (1号トレンチ)
- 12 堀からの湧水状況 (1号トレンチ)
- 13 2号トレンチによる堀の検出状況
- 14 土壠東側の配石検出状況
- 15 堀跡の断面
- 16 堀跡の断面 その2
- 17 堀の堆積上検出状況 その1 (南東隅部)
- 18 堀の堆積上検出状況 その2 (南東隅部)
- 19 堀の堆積上検出状況 その3 (南辺)
- 20 土壠直下 (上墨) の瓦集積地点
- 21 瓦の集積部分
- 22 作業風景
- 23 発掘調査完了・埋め戻し完了状況
- 24 近世の陶磁器 (図化資料) その1
- 25 近世の陶磁器 (図化資料) その2
- 26 近世の陶磁器 その3
- 27 近世の陶磁器 その4
- 28 近世以降の瓦片 (棧瓦)
- 29 近世以降の瓦片 (半瓦)
- 30 近代以降の遺物

# 第1章 調査の経過

## 第1節 調査に至る経過

本書収録遺跡の発掘調査は、長野県上田高等学校による合宿所等改築工事に伴って消滅する上田城跡（上田藩主居館跡）の記録保存を目的として行われたものである。

本件については、「平成21年度以降の公共事業に係る埋蔵文化財等の保護について（照会）」に基づき、長野県教育委員会高校教育課からの回答を確認したところ、上田高校で合宿所を改築する計画があることが判明した。上田高校の校地内は包蔵地上田城跡の範囲内であったため、ただちに遺跡の保護について協議を実施した。その結果、計画地付近に堀や土蔵跡の存在が予想されることから、試掘調査を行い、遺構・遺物が発見された場合には再度協議することで合意した。

旧合宿所解体後の平成21年2月に試掘調査を行ったところ、遺構（堀跡）が残存することが判明した。協議の結果、発掘調査を平成21年5月に行い、報告書を22年2月に発刊することで合意した。

## 第2節 発掘調査の経過

試掘調査（トレンチ掘削面積48m<sup>2</sup>）

平成21年2月6日～2月7日

現場発掘調査（調査面積115m<sup>2</sup>）

平成21年5月13日～5月29日

整理作業

平成21年5月21日～平成22年2月26日

（遺構図面及び写真等の整理、出土遺物の洗浄、注記、接合、図化、遺物データ処理、  
遺構遺物図面トレース、遺物写真撮影、報告書刊行）

## 第3節 調査日誌（抄）

（平成20年度）

11月14日 上田高校と保護協議。年度内に試掘調査を実施し、遺構の有無を確認することで合意。

11月20日 長野県教育委員会あて文化財保護法第94条に基づく発掘調査の通知を提出。

2月6日 試掘調査を実施（～9日）。工事予定地内に堀跡と近代の水路跡を検出。上田高校郷土班3名が調査に参加。

2月9日 保護協議。本発掘調査の実施と経費負担について合意。

3月17日 保護協議。本発掘調査を5月に実施することで合意。

#### 〈平成 21 年度〉

- 4月15日 保護協議。本発掘調査を5月11日から5月31日の間に実施することで合意。
- 5月7日 上田高校と発掘調査受委託契約を締結（6,000千円）。
- 5月13日 発掘調査に着手。バックホーによる表土剥ぎ開始。遺構検出作業開始。
- 5月14日 2号水路跡を検出。
- 5月18日 業者委託により、調査区内に基準点を設置。
- 5月22日 悪天候のため、現場作業を中止。遺物の洗浄を行う。
- 5月23日 上田高校郷土班5名が調査に参加。断面図等を作成。
- 5月26日 調査区全域の平板測量を実施（～27日）。
- 5月28日 調査区の埋め戻し。
- 5月29日 現場作業終了。現場撤収。以降整理作業及び報告書作成作業を行う。
- 1月18日 長野県埋蔵文化財センター市川隆之調査研究員から、陶磁器の時期判定について指導をいただく。
- 2月1日 報告書原稿出稿。
- 2月26日 報告書を刊行し、業務を終了する。

### 第4節 調査の体制

事務局（上田市教育委員会文化振興課）

平成 21 年度 教育長	森 大和（4月 28 日退任）
	小山壽一（4月 29 日着任）
教育次長	小市邦夫
文化振興課長	中部通男
文化財保護係長	尾見智志
文化財保護係	中沢徳士・小林 伝・和根崎剛（担当）

調査組織（発掘調査・整理作業・報告書刊行）

担当者：和根崎剛

発掘作業：石田奈緒、上原祐子、滝澤百合香

整理作業及び報告書刊行：石田奈緒、上原祐子、滝澤百合香、上田高校郷土班

### 第5節 調査の方法

#### 1 発掘調査の方法

##### （1）埋蔵文化財包蔵地の名称と記号

本包蔵地は上田市文化財分布図（上田市教育委員会 1996）には「上田城跡」という名称で搭載されている。しかし、上田高校の敷地内は特に「上田藩主居館跡」あるいは「上田藩主屋敷跡」

などの名称でも呼ばれることが多い。このようなことから、本書では指定文化財の名称でもある「上田藩主居館跡」を用い、必要に応じて「上田城跡」を併記した。

調査にあたり、現場等での記録の便宜を図るために、アルファベット等を用いて次のように遺跡記号を設定した。平成2年度に実施した第二体育館改築工事に伴う調査の際に使用したUDH（上田藩主（U e · D a · H a n s h u）居館跡）を基に、今回の調査が第二次調査となることからUDH IIとし、遺物の注記などにこの記号を用いた。

#### （2）埋蔵文化財包蔵地の範囲

包蔵地の範囲は原則として分布図に記載されている区域とし、上田藩主居館跡の各施設の位置については、近世以降に作成された絵図等を参考にした。

#### （3）試掘調査

試掘調査は遺構の有無と遺構面までの深さ、出土遺物の有無を確認するために、バックホー（0.2級）を用いたトレンチ法で行った。

#### （4）本発掘調査

試掘調査で得た情報に基づき、発掘調査区を設定して面的な調査を行った。表土剥ぎはバックホー（0.2級）を用い、一部を人力で行った。

#### （5）遺構・遺物の調査

遺構の検出作業は人力で検出面の精査を行い、必要に応じてサブトレンチを設定して行った。遺構の名称は記録等の便を図るため記号を用い、遺構番号は時代等に関係なく種類ごと、検出順に付した。

遺物は層位別に取り上げたが、表土付近では近世及び近現代の遺物が混在している。

## 2 記録の方法

### （1）実測の方法

遺構の実測は簡易造り方を用いて行った。遺構、土層断面図は1／10とした。また、遺跡の全体図は作業員により平板測量を実施し、1／100の縮尺で作成した。

### （2）写真

発掘現場撮影に使用した機材は、一眼レフカメラ（Canon EOS 55）とカラーフィルム36枚撮を使用した。フィルムの現像・プリントは業者に依頼して行った。また、補完的にデジタルカメラを用いて遺構の撮影を実施した。また、カラーネガからデジタル化した画像をCD-Rに記録して保存した。

写真は台帳を作成して、整理しながら撮影を行った。

### （3）その他

発掘調査の経過は現場では適宜野帳に記録し、日誌を作成して保管した。遺構は遺構カードを作成して、所属時期や出土遺物等のデータを記入して保管した。

## 第6節 整理の方法

### (1) 実測図等の整理と保管

整理作業は実測図等の整理から着手した。誤りを修正し、実測図には通し番号を付して台帳を作成した。写真プリントはポケット式台紙に整理してファイリングした。デジタル画像はプリントアウトせず、専用の記録媒体（U S B フラッシュメモリ）にデータを保存し、CD-Rは収納ケースに入れプリントとともに整理保管した。

### (2) 遺物の整理と記録

全ての遺物は整理、記録のうえ、ビニール袋あるいは密閉容器に収納して、コンテナに保管した。土器・陶磁器、瓦、ガラス製品等は作業員が水洗、乾燥の後、注記をし、コンテナに収納した。原則として黒色と白色絵具を用い、遺跡名、遺構名、ナンバー等を略号で記入し、油性クリヤーラッカーで被覆した。接合作業、実測の後、遺構、層位毎にビニール袋に収め、コンテナに収納した。

遺物の記録は発掘担当者の指導のもと、図化・計測の大部分を作業員が行った。分類・観察は発掘担当者が行った。写真はデジタルカメラ（Canon Powershot）を用い、画質を3,000万画素と設定して撮影した。なお、デジタル画像はプリントアウトせず、専用の記録媒体にデータを保存した。また、近代以降の遺物については、実測図を割愛して写真のみを報告書に掲載するという方針のもと、業者委託により精度の高い撮影を行った。

## 第2章 遺跡の環境

### 第1節 地理的環境

長野県東部に位置する上田市は、平成18年3月6日に上田市と小県郡丸子町、真田町、武石村が合併して発足した。長野市や松本市などと接するほか、群馬県嬬恋村とも隣接する。市域の北には菅平高原、南には美ヶ原高原が所在し、上田盆地と呼ばれる地形を形成している。その中央を東西に千曲川が流れ、市域は左岸地域と右岸地域に二分される。特に右岸地域は河岸段丘の形成が著しい。

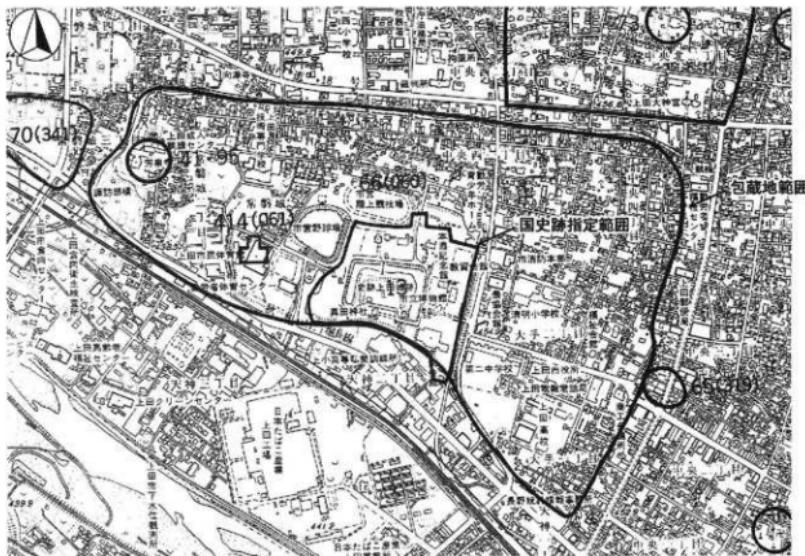
上田城跡はこの右岸第二段丘の南崖面に接して築城された。この崖面下は尼ヶ淵と呼ばれ、近世には千曲川の分流が流れ、城を守る天然の要害として知られる。城は上田泥流層と呼ばれる堅固な地盤の上に築かれているが、その下には染屋層と呼ぶ礫層が存在し、川の浸食による崖面のオーバーハングが著しく、崖面ではこの状況が明瞭に観察できる。

上田盆地は寒暖の差が激しい内陸性の気候で、雨量が乏しく、年間降水量が1,000mmにも満たない全国でも有数の寡雨地帯である。こうした気象要件が国府や国分寺の建立など、上田盆地の歴史にも大きな影響を与えてきたと考えられる。

### 第2節 歴史的環境

上田城は天正11（1583）年に真田昌幸が築城した。昌幸の手による上田城の姿は史料に乏しく明確ではないが、発掘調査等で出土した安土桃山時代の瓦や共伴する石垣材（上田市教委1992）から、本丸や二の丸に（石垣や）瓦葺き建物が所在したことが推定される。また、金箔を押した鰐瓦等の存在から、秀吉配下の城郭として天守あるいはそれに匹敵するような建造物があった可能性がある。しかし、真田昌幸・信繁父子が第二次上田合戦の際に関ヶ原に向かう徳川秀忠軍を上田城で足止めしたことから、昌幸らは紀州に配流され、上田城は破却された。この関ヶ原合戦では真田家は父子分立の途を選び、東軍についた長男信之は昌幸の後、上田藩主となつた。しかし、城の修復は行わず、居館を本丸から三の丸に移し、以降、歴代藩主はここで政務を執つた。

現在、居館跡は長野県上田高等学校の校地となっている。明治8（1875）年12月に第十六中学区予科学校がここに設置（明治9.1に長野県師範学校上田支校と改称～10.12）されて以来、僅かな期間裁判所として利用されたこともあるが、100年以上にわたって学校の用地として利用されてきた。上田変則中学校（明治11.6～14.6）、郡立小県中学校（明治14.6～17.8）、長野県中学校上田支校（明治17.9～19.9）、長野県尋常中学校上田支校（明治28.4～32.3）、長野県長野中学校上田支校（明治32.4～33.3）、長野県上田中学校（明治33.4～昭和23.3）、長野県松尾高等学校（昭和23.4～33.3）と変遷をたどり、現在の長野県上田高等学校に至っている。途中、



第1図 遺跡の位置（上田市文化財分布図）



第2図 調査地点位置図 ( $S=1:2,500$ )

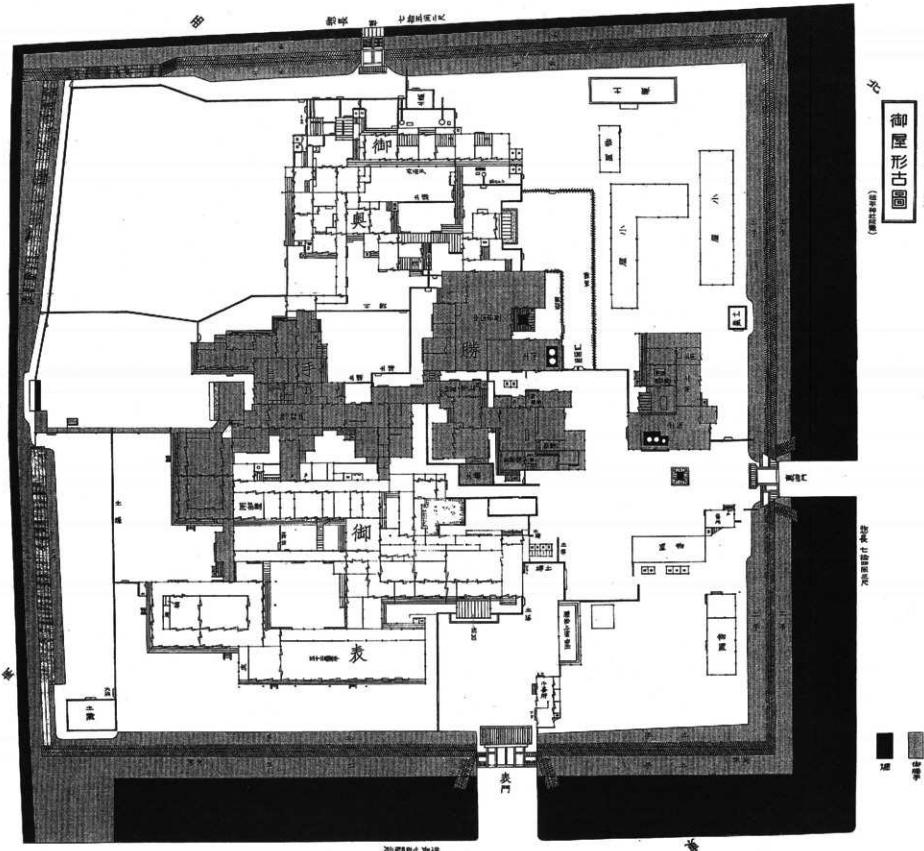
小県高等小学校（明治21.4～28.3）が置かれたり、小県蚕業学校（明治21.4～33.1）が併置されたこともあった。このように、校地として長く利用されてきた居館跡であるが、関連する建物はほとんどが取り壊され、現在は上田市指定文化財の表門、土塀、土塀、堀の一部のほか、上蔵1棟を残すのみとなっている。

居館跡内では、昭和50年以降、新校舎への全面改築事業が進められてきたが、現在とは中近世の遺跡に対する認識の違いもあり、事前の発掘調査等が行われることはなかった。しかし、この頃から県内でも松本城本丸御殿跡や高梨氏館跡などで、めざましい発掘調査の成果が報告されるようになり、中近世居館跡の重要性が認識されるようになり、上田藩主居館跡でも平成2年度に第二体育館改築工事に伴って初めての発掘調査が行われた。近世の遺構は確認されなかつたが、長野県上田中学校時代の寄宿舎の基礎と推定される遺構を検出、遺物も大半は近代以降のものであったが、陶磁器や釘、瓦など近世の遺物とみられるものが出土するなどの成果をあげた。

なお、上田城跡（上田藩主居館跡）の周辺では、中世以前の周知の埋蔵文化財包蔵地はわずか1箇所が確認されているのみである。今回の発掘調査で、僅かではあるが、縄文時代の石器、弥生時代後期の土器片、土師器、土製円板が出土しており、中近世以降、城下町あるいは市街地を形成していく過程で、包蔵地が破壊された可能性がある。失われた包蔵地を復元するにはいささか断片的すぎる出土品ではあるが、こうした中近世以前の遺物についても、今後は注目していく必要があろう。



第3図 発掘調査全体図



第4図 御屋形古図 (昭和15年刊「上田市史」付図)

## 第3章 遺跡の調査

### 第1節 遺跡の概要

#### 1 近世

遺構は近代に埋め立てられたものと推定される堀跡が検出された（第3、7図）。ただし、堀底の堆積土を検出した時点で、大量の湧水があったため、堆積土の除去は危険であると判断し、堀の完掘は断念した。そのため、遺構に伴う遺物は僅かしかなく、一部、堀底まで掘削できた箇所で少量の陶磁器片などの出土を見たが、近世の所産ではなかった。今回の工事では堀の堆積土まで掘削が及ばない計画であったため、現状のまま保存することとした。

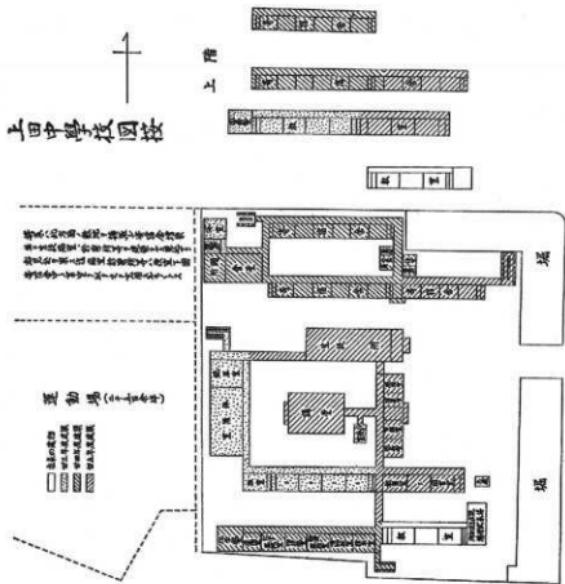
一方、工事計画地にはかつて上蔵が所在したことが絵図に記されており（第4図）、付近を精査したが、既にブルーム連施設が建設されているなど、付近の搅乱が著しく、土蔵の建物基礎などの遺構は発見できなかった。また、現存する土壘が工事計画地まで延びていた可能性もあるため、延長線上を精査したが、土壘の痕跡は全く確認できなかった。

遺物は遺構に伴うものではないが、堀の埋土などから近代の遺物と混在して瓦や陶磁器片、寛永通宝等が僅かに出土している（第8、9図）。

#### 2 近現代

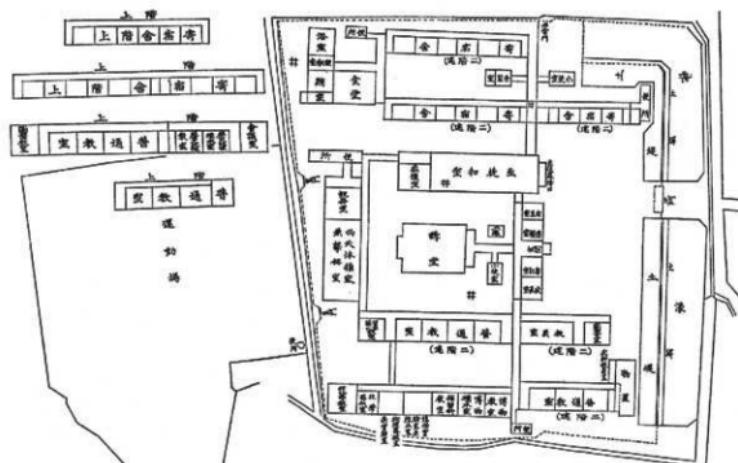
第2章でも触れたが、居館跡は近代以降、校地として利用されてきた。今回、工事計画地において玉石を用いた水路、また、昭和5年に建てられた旧合宿所の漆喰塗りの土壁片や雨落ちと思われる石列等が検出された（第3図）。水路は玉石を用いているが、一部モルタルで修復をしている。水路と旧合宿所であるが、層位的関係から、漆喰塗りの建物は水路の上に所在したことを確認した。半石製の水路の蓋に、直径5cm程度の穴を開けて排水管のようなものを差し込んだ跡があることから、水路が旧合宿所の排水路として利用された時期もあるものと考えた。しかし、その規模から、本来、もっと大量の水を流すために作られたものであることが窺える。これらは近代（明治40年頃か？）に堀を埋めてから作られたものであり、近世まで遡ることはなく、明治時代末期以降の遺構と判断した。水路は三叉路状に分岐しており、旧合宿所の下を流れる部分以外は、石の蓋は存在しなかったものと推定される。最も深いものは現地表面から1m程の深さからも検出されており、出土遺物から判断すると、昭和26年以降、現在の地表面まで更に盛上がされたことが分かった。

遺物は陶磁器、ガラス製品、瓦、貨幣等が出上した。なかでも、明治末期から大正時代の生活用品（薬瓶、飲料瓶、骨製歯ブラシ等）がまとまって出土したことが特筆できよう（第10、11図）。これらは全国でも報告例が増えている遺物であり、今後の研究が期待される。



第5図 上田中学校（明治36年）

「長野県上田高等学校史 草創編」を一部改変



第6図 上田中学校校舎と運動場図面（明治45年）

〔長野県上田高等学校史 中学前編〕を一部改変

## 第2節 基本土層

発掘調査区は上田高校敷地の南東端に位置する。調査区内は一様に平坦であるが、周辺は南側に向かって緩く傾斜する地形であり、発掘調査区は堀を埋めたうえに、更に盛土をしていることが予想された。そのため、堀の埋め立てとは無関係の箇所において基本上層を捉えることとした。その結果、地山層の上に3層の埋土を確認した（第7図）。

堀の部分については、地山層をV字型に掘削して堀が造られ、堀底から一定の高さで水成層と考えられる黒色泥層が堆積している。その後、堀が埋没する過程で堆積したと思われる上層がいくつかみられ、その上には3回にわたって埋土がされたものと考えられる。堀を埋めるために埋土がされ、さらに建物を作った際と推定されるが、土砂が搬入されている。表土には瓦や白壁の破片が多く含まれるが、解体した旧合宿所の材と考えられる。

## 第3節 遺構と遺物

### 1 近世の遺構と遺物

#### （1）堀跡（第3・7図）

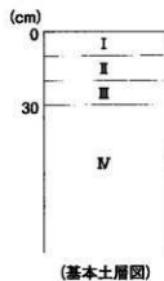
上田藩主居館に伴う堀跡を検出した。

発掘調査区付近は、近世の絵図に堀が表現されているものがあることから、その痕跡の所在は着手前から予想された。そのため、試掘調査の際に、現に水を満えている堀の南側延長線を横断するトレンチを設定して掘削したところ、堀底の堆積土と考えられる黒色泥質土を確認した。この結果をもとに、本調査では堀の南限ラインを確認するために、堀を縱断する方向にトレンチを設定し、掘削を始めた。ところが、試掘調査の際も同様であったが、黒色泥質土まで掘り下げた時点で、大量の湧水が発生した。おそらく、現在水を湛えている堀に起因する水と思われ、関係者で協議した結果、この状態で堀底まで掘削することは現存する堀にも影響を与えるなど、たいへん危険であると判断された。そのため、重機で黒色泥質土の検出面までの埋め土を取り除いて、堀の法面ラインを確認し、直ちに埋め戻すという作業を行った。堀の南限付近では湧水がやや治まったため、堀上部の断面図を作成することができた。その結果、居館跡南側に所在した堀の土塁は、現在の地表面から20cm程下に版築を確認することができ、堀の構造の一端を窺うことができた。その後、南側のラインを検出するために同様の作業を行い、堀の概略線を掘むことができた。

ただし、堀の東側は既に道路造成に伴って一部を失っており、居館南側の土塁の南面も大きく削りとられていることが分かった。埋められた堀をめぐる状況は決して良好なものといえなかつた。

#### （2）出土遺物（第8・9図）

発掘調査区から近世の所産と思われる遺物がわずかに出土した。陶磁器類のほか、瓦片、貨幣

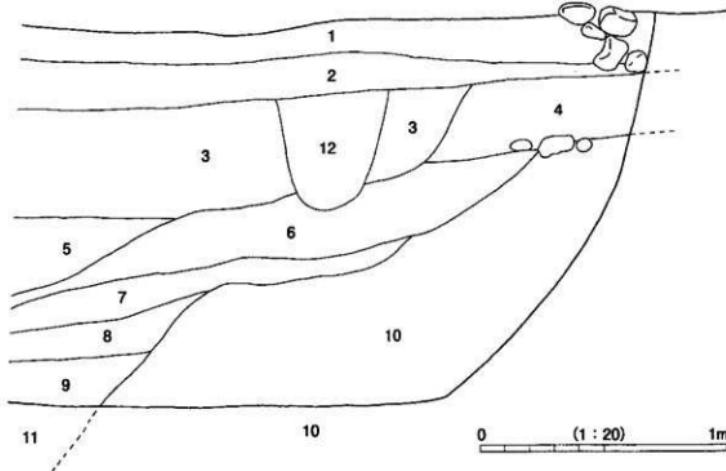


〈基本土層〉

- I層 表土層 ガラスや陶磁器、瓦の小片が多量に混入する。
- II層 埋土 磚や炭化物が多く含まれる。しまりあり。にぶい褐色土。
- III層 埋土 磚や炭化物をわずかに含む。しまりあり。褐色土。
- IV層 地山層 こぶし大の石が多く含まれる。しまりあり。明褐色土。

〈堀跡断面 土層注記〉

- 1層 表土 石や陶磁器等の破片が多く含まれる。  
また、瓦や漆喰壁片が混じる。しまりなく軟らかい。
- 2層 小石や炭化物を多く含む。しまりあり。にぶい褐色土。
- 3層 ロームブロックや炭化物を含む。しまりあり。明褐色土。
- 4層 炭化物や小石を含む。しまりあり。褐色土。
- 5層 ローム粒や炭化物を含む。しまりあり。褐色土。
- 6層 炭化物を含む。しまりあり。黒褐色土。
- 7層 シルト質。炭化物をわずかに含む。しまりあり。明赤褐色土。
- 8層 シルト質。磚や小石が多く混じる。しまりあり。褐灰色土。
- 9層 ロームブロックをわずかに含む。しまりあり。暗赤褐色土。
- 10層 地山層 堀の土壠を形成する。こぶし大の石が多く含まれる。  
しまりあり。褐色土。
- 11層 泥質黒色土。水分を多く含んでいる。堀の堆積土。黒色土。
- 12層 カクラン ロームブロックや炭化物を含む。しまりなし。褐色土。



第7図 基本土層と堀跡断面図

である。

#### ① 陶器（第1表）

すべて破片であり、全体形を窺えるものは少ない。図化したものは第8図の3点のみである。1は片口鉢の底部と思われ、「ツヤ」の墨書きが残る。胎土は上田周辺で焼かれた可能性を示唆する。2は伊万里焼・染付の碗、3は京焼系の碗である。全て18世紀末から19世紀初めのものに位置付けられ、図化しえなかった破片（写真26・27）も概ねこの時期の所産と考えられる。伊万里焼の碗や皿、京焼（系）の徳利や碗、また、瀬戸美濃の破片もある。また、上田周辺で焼かれたものと思われる一群が比較的多くみられる。これらの中には水漉をしているものも見受けられるが、ほとんどは砂が混じった胎土で、鉄分が多く、赤っぽい色をしている。他にも擂鉢、甕などがみられる。

#### ② 瓦

発掘調査区からは近代のものと考えられる瓦が大量に出土している。焼きが悪く、赤茶色の瓦が多く混じっていた。こうした状況の中で、近世の瓦を抽出して持ち帰るのは難しい作業ではあったが、棟瓦葺で紋様等に近世の特徴を持つ軒瓦を僅かに見つけることができた。

第9図-1～7は軒瓦で、1は菊花紋、2～4は巴紋を有する一群である。2は現存する近世末期の門に載っている軒瓦の紋様と酷似している。

また、土塁の法面に大量の瓦が埋まっている部分があり、露出し、抜け落ちる可能性があるものを採集した（写真20・21）。土塁は近代以降、何度か改修をしており、その際に埋められたものである可能性もある。今回は資料を提示するのみに留め、これらの瓦の時期については、後考を待ちたい。

#### ③ 銭貨

近世に製造された貨幣は、寛永通宝が2枚、表土から出土している。表面採集品であるなど、居館跡に伴なうものとは認定し難いが、近世の遺物として報告しておく。

## 2 近現代の遺構と遺物

### （1）水路遺構（第3図）

旧合宿所の解体後、既に一部が地表面に露出していた。玉石を用いているものの、一部でモルタルが使用されている。平石で蓋をし、更に上に木板を敷いてあった。水路の中は空洞となっており、当初は旧合宿所の排水溝ではないかと考えた。しかし、検出作業を進めるにつれ、合宿所程度の生活排水を流すためのものにしては、大型のものであることに気付いた。さらに、旧合宿所の下以外にも一連の水路が存在することが判明し、水路が敷設された目的を改めて考え直さざるを得なくなった。なお、水路は一連のものであるが発見順に1～3号の番号を付した。

検出された水路は三叉路状になっており、土塁側水路（3号水路）から流れてきた水を旧合宿所の下で南側に流す水路（1号水路）と北側に流す水路（2号水路）に分岐する。土塁の保護の

ため、流れてくる源を特定することは叶わなかったが、旧合宿所の下に、水を止めるための板を嵌め込むための溝が作られており、必要に応じて水の行き先を調節していたことがうかがえる。

今回の調査では、水がどこから流れてきていたのか、そしてどこに通じていたのかは明確にならなかった。旧合宿所が使用された当時は、台所または浴室の水を流すために使われていたようで、石の蓋に穴を開けて排水管状のものを差し込んでいた状況が窺える。また、埋められた時期も場所により異なるようで、2号水路は石の直上から昭和26年製造の5円黄銅貨が出土しており、(写真6)この付近に盛土がされた時期を暗示している。

### (2) 旧合宿所の遺構

表土から白い土壁の破片が出土したが、今回解体した旧合宿所の材と考えられる。旧合宿所は昭和5年に建てられたもので、第二次大戦中に撮影された写真にも、当該地に白壁の建物が写っている。また、一部であるが、雨落石の列を検出した。上面に土塙が覆い被さるように散在しており、旧合宿所に由来するものであろう。

### (3) 遺物

遺構に伴う遺物は僅かで、ほぼすべてがⅠ、Ⅱ、Ⅲ層中からの出土である。

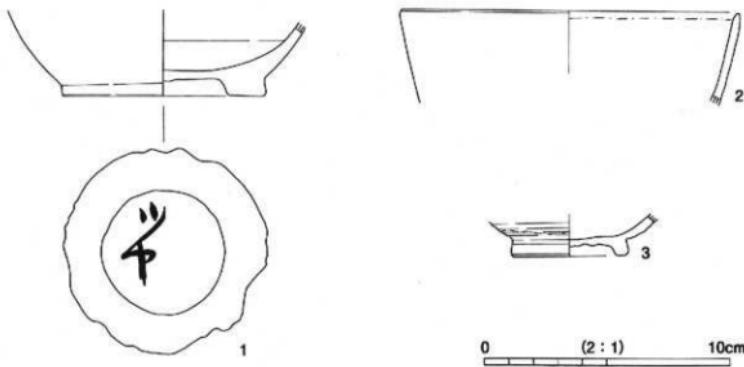
陶磁器は近現代の所産で、旧制中学当時のものや、旧合宿所に伴うものと考えられる。茶碗や蓋、湯呑み茶碗が圧倒的に多く、徳利や盃、通い徳利の破片もあるなど、酒器も一定量含まれる。また、急須や壺なども見られる。

ガラス製品も近現代のものが採集された。特に目を引くのは、明治末期から大正時代の薬やインク、酒などの瓶である(第10・11図)。こうした遺物には東京都汐留遺跡(旧新橋駅舎跡)の出土品と同じものが見られ、信越本線開通以降の物品の流通を考えるうえで興味深い資料である。日薬や白髪染剤、インク、飲料瓶にはメーカー名が分かるものもある。

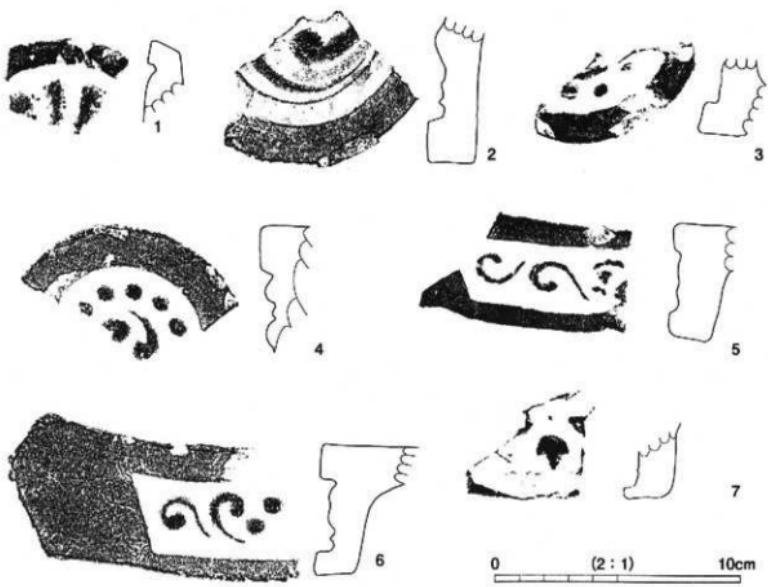
上記以外にも、歯ブラシ(骨製、樹脂製)や革製品、碍子・碍管と呼ばれる絶縁体、レンガなどが採集されている(写真30)。また、ビー玉が多く採集されており、ラムネ瓶に伴うものである可能性もあるが、瓶本体は確認できなかった。

## 3 その他の時代の遺物

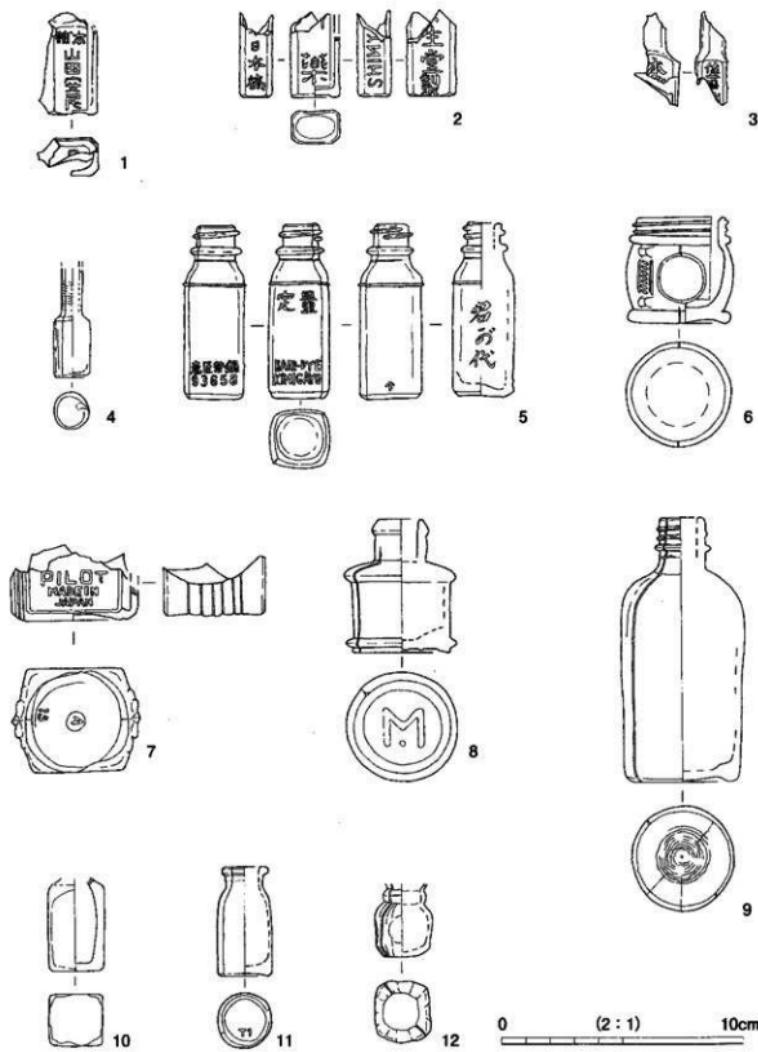
遺構は検出されなかったが、埋土から縄文時代の石器、弥生時代後期～平安時代の土器がごく少量出土した。ただし、図化したものは土師器を転用した上製凹板1点のみであり(第11図)、その他は摩滅の著しい小片である。



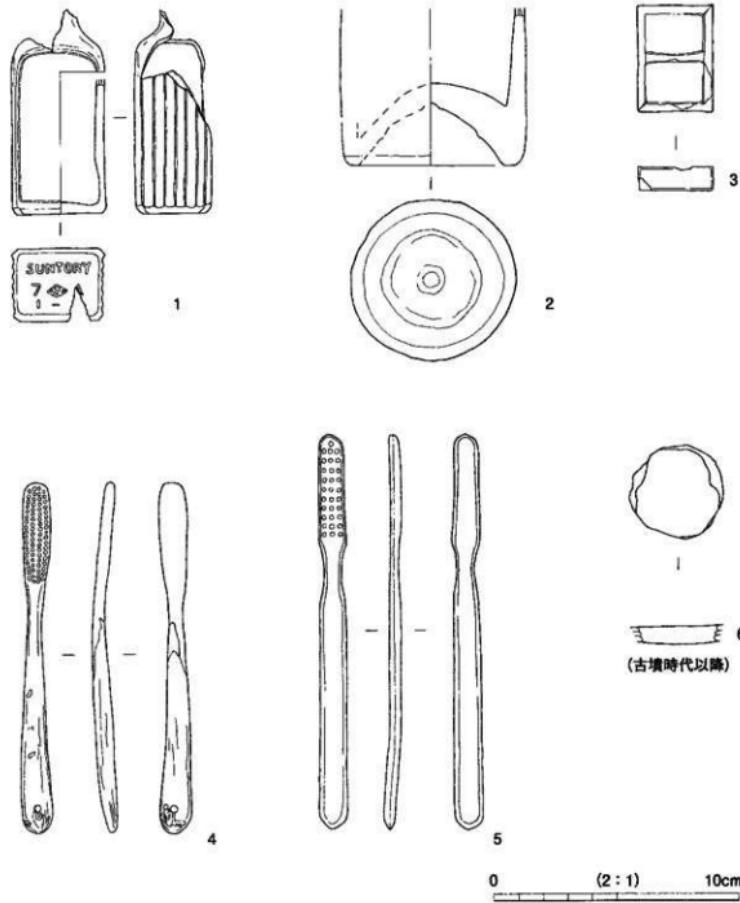
第8図 近世の陶磁器



第9図 近世以降の瓦



第10図 近代以降の遺物（1）



第11図 近代以降の遺物（2）

## 第4章 調査の成果と課題

発掘調査及び整理作業のなかで明らかになったこと、また、これからの課題を時代毎に整理して、本書のまとめとしたい。

### 1 近世

上田藩主居館に伴う堀跡が検出された。また、遺構には伴わないものの、僅かに近世の陶磁器、瓦片、貨幣が出土した。陶磁器については、堀の埋土からの出土ではあるが、茶碗や甕、描鉢といった日用品が主体である。時期は幕末のものがほとんどであり、伊万里や瀬戸美濃、京焼が含まれるもの、それほど高価なものではないことから、これらが上田藩主居館で使用された遺物と考えるにはいささか難があろう。堀の埋土を居館跡内から採取したとは考えにくいこと、また、完形資料に乏しく、破片接合もままならないことから、外部から持ち込んだ土砂の中に混じっていたものと考えたい。繩文～平安時代の遺物が僅かに混じっていることも同様の理由で考えられよう。また、その胎土から上田周辺で焼かれたものと推定した陶器が一定量含まれており、当時の生産・流通状況を考えるうえで興味深い。

瓦片は軒瓦のうち、紋様があるもののみを図化した。江戸時代後期のものが僅かに含まれるが、居館創建当時の古いものは見当たらない。土塀の南端から、表門に現在も載っている軒瓦と紋様が同じものが出土しており、かつては土塀全部にこの瓦が葺かれていたことを推定させる。なお、土塀の南端（土塁中）に平瓦が集中して埋まっている箇所を確認した。瓦は何回か葺きかえられていることが史料から判明しており、その所属時期については今後の検討を要する。一部を採集したが、工事に伴って失われる恐れがないことから、そのまま現地で保存してある。

検出された堀跡は、近世以降の絵図等に描かれていたため、その存在は試掘調査の前から想定されていた。堀が埋められた時期は詳細な資料が無く判断としないが、上田高校に保管されている図面から、明治40年前後に埋められたものと思われる（第5・6図）。前述したとおり、湧水が激しく、堀の完掘は叶わなかった。一部堀底まで掘削した際に、黒色泥質土中から僅かに近代以降の陶磁器や瓦片、革製品等を検出したが、近世の遺物は確認できなかった。こうした状況から、埋め立てられるまでは堀に水が溜まっている状態だったことが推定できよう。

一方、第4図に描かれている土蔵であるが、今回の調査では遺構は確認できなかった。

上田藩主居館跡内には現在も居館に伴う構造物（表門等）が残っている。こうした文化財の保護はもちろんであるが、遺構の所在については今後も学校のご理解とご協力をいただきながら確認を進めていきたいと考えている。

## 2 近代～現代

当該期の遺構としては、建物の基礎と水路跡が検出された。建物基礎は今回の改築に伴って解体された旧合宿所のものである。また、水路は用途が判然とはしないが、大型で大量の水を流すことができるものである。その一部は旧合宿所の排水路としても使用されたものであり、水路内からは昭和時代の遺物と考えられる菓子パンのビニール袋なども見つかっている。ただ、水路が本来の機能を失った時期については、今回の調査では明らかにできなかった。現在の堀の水を排出するためのヒューム管が、この水路を破壊しており、廃絶された時期を示唆している。

近代以降の遺物であるが、陶磁器については十分な検討ができなかった。今後、必要に応じて再検討したいと考えている。また、近代のガラス瓶や両ブラシ等の道具については、東京都汐留遺跡での報告を契機に、全国で報告例が増えている。県内では、長野市の松代城下町等での報告があるが、上田城下では初めての報告例である。今後、類例が増え、長野県内の調査研究が進展することを期待するものである。

長野県上田中学校は近代の学校であるが、この造構が地域の歴史を理解するうえでたいへん重要なものと考え、今回の調査において本報告に記録して後世に残すことが最善であると判断させていただいた。ご協力いただいた長野県上田高等学校に厚く感謝の意を表するとともに、発掘調査に際してご指導をいただいた長野県教育委員会文化財・生涯学習課に御礼を申し上げたい。

また、上田高校郷土班の皆さんには発掘現場において、遺物の採集、堀断面図の作成など、たくさんのご協力をいただいた。顧問の林津先生をはじめ、皆さんに御礼を申し上げたい。

### 〈引用参考文献〉

- 愛知県埋蔵文化財センター 2008 『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』  
上田高等学校同窓会 1980 『長野県上田高等学校史 草創編』  
上田高等学校同窓会 1983 『長野県上田高等学校史 中学前編』  
上田高等学校同窓会 1987 『高校風土記 上田高校ものがたり』  
上田高等学校同窓会 1987 『長野県上田高等学校史 中学後編』  
上田高等学校同窓会 1995 『長野県上田高等学校史 高校第一編』  
上田市教育委員会 1977 『上田市の原始・古代文化 埋蔵文化財分布調査報告書』  
上田市教育委員会 1991 『上田藩主屋敷跡 長野県上田高等学校第二体育館解体新築事業に伴う試掘調査報告書』  
上田市教育委員会 1992 『史跡上田城跡』 平成3年度発掘調査概報  
桜井準也 2006 『ガラス瓶の考古学』  
東京都埋蔵文化財センター 2000 『汐留遺跡Ⅱ』  
東京都埋蔵文化財センター 2003 『汐留遺跡Ⅲ』  
東京都埋蔵文化財センター 2006 『汐留遺跡Ⅳ』

図版	番号	出土状況	種別	器種	色調等	法量(cm)			重量(g)	時期	備考
						口径	底径	器高			
		表採	伊万里焼 5期	碗	染付	-	-	-	4.5	幕末(18c末~19c初)	
		表採	在地胎土	ほうろく	暗褐色	-	-	-	34.3	幕末(18c末~19c初)	
		Tr06		灯明皿or土瓶	暗灰色	-	-	-	10.1	文化文政期	
		Tr06 黒色土層		甕	暗緑色	-	-	-	29.8	幕末(18c末~19c初)	
		Tr06 黒色土層 在地胎土		甕	褐色	-	3.9	(3.1)	42.7	幕末(18c末~19c初)	胎土水滌
		Tr06 黒色土層 在地胎土		甕	青白色	-	-	-	8.3	幕末(18c末~19c初)	胎土鉄分多い
		表採	擂鉢	甕	赤褐色	-	-	-	21.0	幕末(18c末~19c初)	在地胎土
8 1	Tr06埋埋上	在地胎土	片口鉢	暗褐色	-	8.2	(3.5)	228.2	幕末(18c末~19c初)	墨書「ツヤ」三足トチソ鉢	
		表採	在地胎土	擂鉢	赤褐色	-	-	-	26.4	幕末(18c末~19c初)	
		表採	在地胎土	甕?	暗赤褐色	-	-	-	30.4	幕末(18c末~19c初)	
		II層	京焼系	徳利	黄灰色	-	3.9	(2.7)	22.3	幕末(18c末~19c初)	
		II層	在地胎土		青白色	-	-	-	9.9	幕末(18c末~19c初)	胎土鉄分多い
		II層	京焼系	碗	黄灰色	-	-	-	1.7	幕末(18c末~19c初)	
8 2	SD1覆土	伊万里焼 5期	碗	染付	13.8	-	(3.8)	19.8	幕末(18c末~19c初)		
8 3	SD1覆土	京焼系	碗	黄灰色	-	4.7	(1.5)	30.8	幕末(18c末~19c初)		
	SD1覆土	在地胎土	甕	灰色	-	-	-	8.9	幕末(18c末~19c初)		
	SD1覆土	在地胎土	甕	青白色	-	-	-	46.2	幕末(18c末~19c初)	胎土鉄分多い	
	SD1覆土	瀬戸美濃	仏ばん	茶灰色	-	-	-	2.6	幕末(18c末~19c初)		
	SD1覆土	伊万里焼 5期	碗	染付	-	-	-	5.1	幕末(18c末~19c初)	5期	
	SD2覆土	在地胎土	皿?	茶灰色	-	-	-	5.2	幕末(18c末~19c初)		
	SD2覆土	伊万里焼 5期	皿	染付	-	4.1	(1.0)	28.3	幕末(18c末~19c初)	5期	
	SD2覆土	瀬戸美濃	汁注ぎ	黄灰色	-	-	-	13.8	幕末(18c末~19c初)		

第1表 近世陶磁器観察表

図版 番号	出土状況	種別	残存度	色調	透明度	法量(cm)			重量 (g)	銘	備考
						長さ	幅	厚さ			
						口径	底径	高さ			
10 1	表採	市販薬瓶	2/5残存	青色	透明	-	2.1	(4.3)	10.8	(ロート日薬) 本體 山田安眠	底部にもエンボスあり
10 2	II層	市販薬瓶	2/5残存	青色	透明	-	2.0	(3.2)	11.3	(資)生堂製 (神) 葉 (東京) 日本橋 SHINY(AKU)	Nが逆になっている
10 3	SD1覆土	市販薬瓶	-	青色	透明	-	-	(3.6)	2.9	本○ 佐藤(尚?)	
	II層	市販薬瓶	-	青色	透明	-	-	(1.5)	0.8	三○	
10 4	SD1覆土	処方薬瓶か	ほぼ完形	無色	透明	-	1.4	4.5	5.2		
	SD2覆土	薬瓶	-	無色	透明	1.5	-	(2.9)	5.3		口縁～頸部のみ残存
	SD2覆土	薬瓶	-	無色	透明	1.7	-	(3.6)	15.5		口縁～頸部のみ残存
10 9	SD3覆土	薬品瓶	完形	茶色	透明	19.5	4.6	10.9	102.3		
10 5	SD2覆土	化粧品瓶	完形	無色	透明	1.8	2.1	7.2	38.9	君が代 意匠登録 93658 定量 HAIR-DYE KIMIGAYO	白髪染剤
10 6	転埋土	ボーマード瓶	完形	白色	不透明	3.7	4.3	4.5	71.4		メヌマボーマード か?
10 7	SD2覆土	インク瓶	1/3残存	無色	透明	-	5.3	(2.3)	44.9	PILOT MADE IN JAPAN 15 A	
10 8	II層	インク瓶	完形	青緑色	半透明	18	4.1	5.5	71.8	M+	
	II層	インク瓶	-	無色	透明	-	-	(3.1)	15.0		
	II層	インク瓶	-	無色	透明	-	-	(0.3)	9.8	NB 3	
11 1	SD2覆土	ウイスキー瓶	1/3残存	無色	透明	-	4.7	(8.3)	54.3	SUNTORY 7 A 1-1	サントリー

第2表-1 近現代ガラス製品観察表

図版	番号	出土状況	種別	残存度	色調	透明度	法量(cm)			重量(g)	銘	備考
							長さ	幅	厚さ			
							口径	底径	高さ			
11	2	SD1櫻土	ワインボトル	—	茶色	透明	—	7.3	(6.4)	202.3		
		表採	牛乳瓶	完形	無色	透明	4.1	4.9	14.0	244.0	東信ミルクプラント 電話 上山 1858 ○正 180cc 一石 8c	
		表採	サイダー瓶	—	無色	透明	—	—	(3.6)	13.9	K(IN)SEN	金線サイダー 明治32年以降
		Ⅲ層	飲料か	—	青緑色	半透明	2.4	—	(7.6)	47.0		コルク栓式
		表採	飲料か	—	青緑色	透明	2.4	—	(4.0)	18.2		コルク栓式
		SD2櫻土	飲料か	—	青緑色	透明	2.4	—	(5.1)	19.8		王冠式
		SD1櫻土	化粧か	—	青緑色	透明	—	1.7	(3.1)	10.7		
10	10	II層	化粧か	3/5残存	青緑色	半透明	—	2.1	(3.9)	29.5		
10	11	SD3櫻上	—	完形	無色	透明	1.9	2.3	4.6	19.0		
10	12	II層	—	3/4残存	青緑色	透明	(6.0)	(6.5)	3.2	17.8		
		表採	ガラス玉	完形	青緑色	半透明	2.2	—	—	18.2		
		II層	ガラス玉	完形	緑色	透明	1.3	—	—	5.7		
		II層	ガラス玉	完形	青色	半透明	1.1	—	—	3.0		
11	3	II層	用途不明	完形?	青白色	半透明	4.4	3	0.9	20.3		

第2表-2 近現代ガラス製品観察表

図版	番号	出土状況	種類	法量(cm)			重量(g)	残存	色	備考
				長さ	幅	厚さ				
11	4	II層	歯ブラシ	14.3	1.2	0.8	12.1	完形	黄白	動物骨製(植毛欠失)、金属線遺存
11	5	SD1覆土	歯ブラシ	16.1	1.1	0.5	8.9	完形	濃青	化学製品(植毛欠失)、金属線遺存
		表採	歯ブラシ	(11.5)	0.9	0.8	7.2	4/5残存	青透明	ブラシ部分折失
		埴埋土	碍子	(7.1)	-	-	42.4	1/4残存	白	
		II層	碍管	(7.6)	1.4	1.4	27.7	-	白	
		表採	寛永通宝	2.4	2.4	0.1	1.4	完形	濃緑	新寛永
		II層	寛永通宝	2.2	2.2	0.1	1.8	完形	濃緑	新寛永
		SD2覆土	5円黄銅貨	2.2	2.2	0.1	4.0	完形	茶	昭和26年製造
		表採	1円アルミ貨	2.0	2.0	0.1	1.0	完形	銀	昭和54年製造
		II層	ボタン	2.1	2.1	0.6	2.4	完形	茶	「高」の字あり
		II層	ボタン	2.1	2.1	0.4	3.5	完形	茶	校章「高学」
		II層	金属札	5.0	3.3	0.1	11.3	完形	茶	複数の刻字あるが不鮮明。最下に「助」

第3表 近現代の遺物観察表





1 発掘調査区と着手状況



2 基本土層



3 1号水路と旧合宿所の基礎（北西から）

写真図版 2



4 1号水路（東から）



5 2号水路（南から）



6 2号水路（東から）



7 3号水路（東から）



8 旧合宿所の雨落造構



9 現在の堀の排水管と3号水路の切り合い

写真図版 4



10 堀跡の断面（1号トレンチ）



11 堀跡の完掘状況（1号トレンチ）



12 堀からの湧水状況（1号トレンチ）



13 2号トレンチによる堀の検出状況

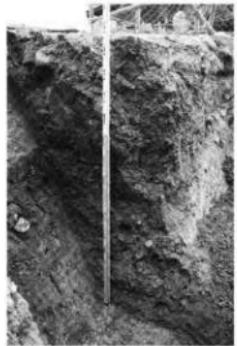


14 土壙東側の配石検出状況



15 堀跡の断面（2号トレンチ）

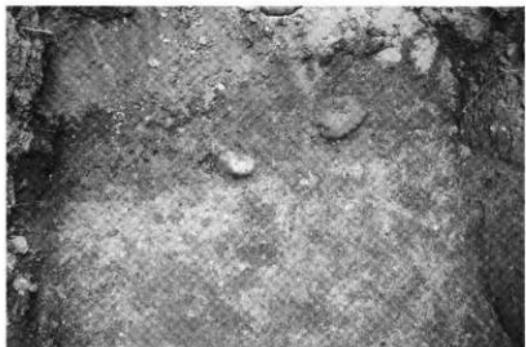
写真図版 6



16 堀跡の断面 その2



17 堀の堆積土検出状況 その1 (南東隅部)



18 堀の堆積土検出状況 その2 (南東隅部)



19 堀の堆積土検出状況 その3（南辺）



20 土堀直下（土壘）の瓦集積地点



21 瓦の集積部分

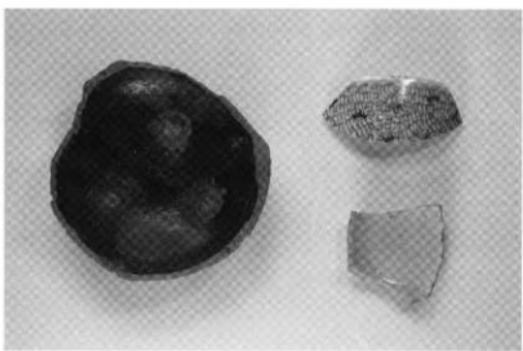
写真図版 8



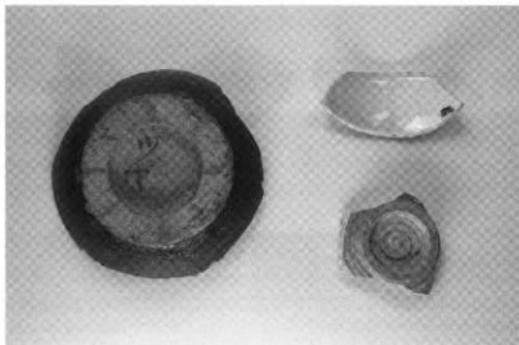
22 作業風景



23 発掘調査完了・埋め戻し完了状況



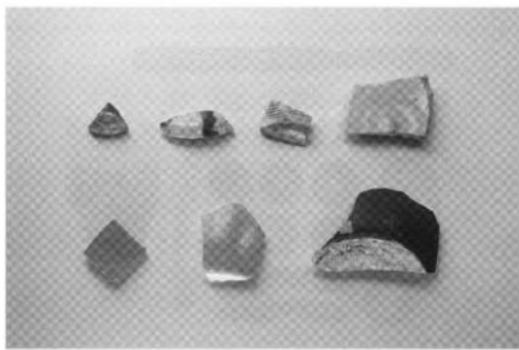
24 近世の陶磁器（図化資料）その1



25 近世の陶磁器（図化資料）その2



26 近世の陶磁器 その3



27 近世の陶磁器 その4

写真図版 10



28 近世以降の瓦片（棧瓦）



29 近世以降の瓦片（平瓦）



30 近代以降の遺物

報告書抄録

ふりがな 書名	うえだじょうせき(うえだはんしゅきょかんせき) 上田城跡(上田藩主居館跡)						
副書名	—長野県上田高等学校合宿所等改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—						
シリーズ名	上田市文化財調査報告書		シリーズ番号	第109集			
編著者名	和根崎剛						
編集機関	上田市教育委員会(事務局:文化振興課 文化財保護係)						
所在地	〒386-0025 長野県上田市天神二丁目4番55号 電話0268(23)6361						
発行年月日	平成22(西暦2010)年2月26日						

所収遺跡名	所在地	コード		調査期間	発掘調査面積(m <sup>2</sup> )	調査の原因
		市町村	市遺跡番号			
うえだじょうせき 上田城跡 (上田藩主居館跡)	上田市大手	28212	上田 66	20090510 ～ 0529	115m <sup>2</sup>	合宿所等改築工事

所収遺跡名	種別	主な時代	検出遺構	検出遺物	特記事項
上田城跡 (上田藩主居館跡)	城館跡	近世	堀跡	陶磁器、瓦片、貨幣	工事が及ばないため、堀の底部付近は現状のまま保存した。出土遺物は近世遺構に伴うものではなく、搬入土に混入したものと考えた。
	学校跡	近代以降	水路等	陶磁器、ガラス瓶、貨幣など	近代になって堀が埋め立てられ、水路や今回解体した合宿所が立てられた。旧制中学当時の遺物が多く採集された。

要約	上田藩主居館に伴う堀跡を検出した。ただし、現在も水を湛えている堀に起因して、ひどい湧水があり、堀跡の完掘は叶わなかった。そのため、遺物はほとんど検出できなかった。堀は近代になって埋め立てられたものであり、埋土から近世の陶磁器が出土したが、埋土は居館外からの搬入土とみられることや、出土した陶磁器の組成から、居館に伴うものではないと推定される。 近代以降は長野県上田中学校等の校地となつたが、関連する遺物として陶磁器や明治時代末期以降のガラス瓶、瓦などが出土した。
----	--

上田市文化財調査報告書 第109集

上田城跡（上田藩主居館跡）  
長野県上田高等学校合宿所等改築工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行 平成22年2月26日  
発行者 長野県上田高等学校  
上田市  
上田市教育委員会  
印刷 一喜堂印刷